

格表示と言語普遍性

——格における文法的関係と意味的關係をめぐって——

龍 城 正 明

1. 序 論

言語における基本構造は S, V, O で表示できるが、これは何が主語で、何が動詞で、何が目的語であるかという文法的な関係のもとに捉えられてきた結果である。例えば、John reads a book. という文において、John が S にあたるが、これは「動作を起こす働きがあるもの」という意味解釈から、行為者 (actor) でもあり、この語の格は主格 (nominative = nom) であるとされた。すなわち、この文では John という語に、主語、行為者、主格¹ という 3 つのカテゴリーが融合して存在しており、この文を見る限り、主語は nom をもって具現されるということが自明の理のように思われてきた。しかし、様々な自然言語の調査と研究により²、主語はどの言語においても普遍的な格表示 (例えば nom) で具現されるのではなく、少なくとも 2 つの異なった格表示により主語の概念が具現されることが分かった。ひとつは先述の nom と呼ばれるものだが、もう一つは能格 (ergative = erg) と呼ばれるものである。このことは主語という概念を表すのに用いられる格表示は決して「普遍的」なものではなく、言語によって異なるということに他ならない。

ここで、2 つの問題がある。まず、主語の表示には、nom と erg という 2 つの異なった格表示があるにせよ、主語という概念をもつ語に対しては常に一定の格表示が成されるという点から、格表示は文法的に規定されるのか

否かという点。すなわち、格表示とは「単なる文法用語」であるかどうかという問題である。次に、もし、他の要因が格表示に関与しているとすれば、それは何なのかという問題である。そこで本論では、主語に対する格表示の2つの表示を概観し、英語や日本語のように主語 = nom という概念が確立している言語には erg という概念は適用できないのか、また、格は文法のみによって規定されるのかどうかという点から考察を試みるものである。

2. 言語における格表示の2分類

動詞は通常、他動詞と自動詞に分類されるが、英語や日本語のような言語では、この2つの動詞の主語として具現する語に付与される格は共に nom である。しかし、Dyirbal, Inuit, Basque などの言語では自動詞の主語と他動詞の主語では、前者は絶対格 (absolute = abs) で、後者は能格 (erg) という2つの異なった格表示をもつ。このことより、言語は(1)に示すように、最近では2つのタイプに分類されている。

(1) Accusative system		Ergative system
	$\left. \begin{array}{l} A \\ S \\ P \end{array} \right\}$	ergative
nominative		absolute
accusative		
vi: S (nom)		S (abs)
vt: A (nom) P (acc)		P (abs) A (erg)

(1)でのSは自動詞文の single obligatory argument で、A, Pは他動詞文の two obligatory arguments であり、このようなA, S, Pという表示を用いて格を表すことを本論では ASP System と呼ぶことにする。ここで、英語と Dyirbal の「語の省略」に関する興味ある例を見てみたい。⁸

(2) English

- a. The man hit the woman.
 A P

- b. The man came here.
S
- c. The woman came here.
S
- d. The man hit the woman and \emptyset came here.
A P (A)

(3) Dyirbal

- a. Balan d^ɔugumbil bangul yarangu balgan.
P woman-abs A man-erg hit
- b. Bayi yara banin^ɔu.
S man-abs came-here
- c. Balan d^ɔungumbil banin^ɔu.
S woman-abs came-here
- d. Balan d^ɔungumbil bangul yarangu balgan, \emptyset banin^ɔu
P woman-abs A man-erg hit (P) came-here

(2d) では came の省略された主語は the man (A) であるが, (3d) では the man にあたる bangul yarangu ではなく the woman にあたる Balan d^ɔungumbil (P) となる。英語では主語の位置にある語は常に nom という格をもつが, Dyirbal のように自動詞文と他動詞文により主語の格が異なると, 自動詞 banin^ɔu の主語は abs しかとれないので, erg の bangul yarangu は自動詞の主語としてはブロックされることになる。英語の主語は A, S であるのに対し, Dyirbal の主語は S, P ということになり, ここでの格を決定するパラメーターは自動詞か他動詞かということになる。すなわち, 格は主語という概念により決定されるのではなく, 動詞によって決定されるのである。英語のように自動詞文, 他動詞文共に同じ nom という格を持ち, 格決定が動詞によって成されない言語では, 自動詞と他動詞という分類はパラメーターの基準とならないように見える。しかし, 英語にも前述の APS system を用いれば, 自動詞と他動詞における同じ主語 = nom も, 異なった

ものとして解釈することが可能となる。この点については、次節で M. A. K. Halliday の functional grammar における解釈にしたがって見ていくことにする。

3. 英語における ergative な解釈法

Halliday は transitivity という概念から動詞を基本とする process, そして、英語ではその前後に現れることになる名詞句を participant と呼び、英語に見られる様々な構文を process-participant configuration として分類した。⁴その内の特殊なケースとして、動詞を自動詞と他動詞という二分類によらず、participant の射程範囲をパラメーターとする分析を試みた。すなわち、participant のひとつである actor は process に関与するが、その process は行為者である actor の射程範囲を越えて、何か他の者に影響されるか否かという点から、Ergative / Non-Ergative (Erg / Non-Erg) という解釈を試みたのである。先ず、以下の文 (4a, b) を見てみる。⁵

- (4) a. The lion chased the tourist. Erg.
 b. The tourist ran. Non-Erg

(4a) と (4b) における tourist はお互いに関連があり、(4a) でライオンに追いかけられた tourist が (4b) で「走って逃げて」いると考えると、(4a) における lion は tourist に影響を及ぼす(したがって、Ergative) が、(4b) の tourist は影響を及ぼす対象がない(したがって、Non-Ergative) ということになる。もっとも、ここでは主語としての lion と tourist が異なるため、(4a) の tourist が goal で、(4b) の tourist が actor であるという解釈が成り立ち、それぞれに異なった participant role の付与が可能であるが、以下の文 (5a, b) を見てみると、tourist の現れている位置は共に文頭(すなわち主語)なので、これは両方とも actor としか分析できない。

- (5) a. The tourist hunted. hunted=vi. tourist=S Non-Erg

b. The tourist hunted the lion. hunted=vt. tourist=A Erg

また、動詞に関しても (5a) の hunted は自動詞であり、(5b) の hunted は他動詞であるが、この違いにも関わらず共に、actor という同じ participant role が付与されてしまう。しかし、ASP system を用いれば、(5a, b) に見られるように (5a) の tourist はSであるが、(5b) の tourist はAということになり、同じ主語でも異なった機能をもっていることが分かる。したがって、ここでの違いは、「従来の」自／他動詞という分類と、主語には常に actor という participant role だけが付与されるという分析法では説明できないことになる。そこで、(5a) は tourist が「影響を及ぼす対象のない actor」で、(5b) は「影響を及ぼす対象をもつ actor」として分類する必要が生じる。さらに、以下の (6a, b) を見てみよう。

- (6) a. The tourist woke. woke=vi. tourist=S Non-Erg
 b. The lion woke the tourist. woke=vt. tourist=P Erg

(6a) の tourist も (6b) の tourist も共に「目覚めた」には違いないが、(6a) の tourist は actor であるのに対し、(6b) の tourist は goal である。しかし、これでは意味的解釈での一貫性に欠けることになる。そこで、「tourist が目覚めたのは lion に起こされたから」と解釈すれば、(6a, b) の tourist が目覚めた因果関係が説明可能となる。さらに、以下のような例文を見てみよう。

	X (S)	Y (A)	Z (P)
(7) a	1. The boat sailed.	2. Mary	sailed the boat.
b	1. The cloth tore.	2. The nail	tore the cloth.
c	1. Tom's eye closed.	2. Tom	closed his eyes.
d	1. The rice cooked.	2. Pat	cooked the rice.

従来の Transitive / Intransitive (Tr / Int) 解釈では (7a-d) における X 項と Z 項の関係は actor / goal と呼ばれるものであった。しかし、(7a-d)

におけるX項は、(7a)の boat を始めとして、何らかの外的要因がなければ、「漕ぐ」こともできないし、(7b)の cloth が「破れる」こともない。すなわち、Mary が「漕ぐ」のであり、nail が cloth を「破る」のである。このような解釈をすると、(7)の例文における共通の participant には同じ participant role が必要となり、単に自動詞と他動詞という動詞による分類により、(7a1)の boat が自動詞の主語であるから、actor で nom であり、(7a2)の boat が他動詞の目的語であるから、goal で accusative であるとは言いきれなくなる。そこで、Erg / Non-Erg という解釈、すなわち、主語に現れる participant は影響力があるのか否かという観点にたって participant role を見てみれば、X項はそれ自体には影響力がないので、Non-Ergative、それに反して、Y項は影響力があるので、Ergative と解釈でき、このY項には agent という新しい participant role を付与することができる。またX項とZ項は共に影響力がないので同じ medium という participant role を付与し、これによって、同じ語が具現するX項とZ項の共通性が保たれることになるというのである。

X, Y, Z項は Tr / Int 解釈と Erg / Non Erg 解釈により、以下のよう異なる participant role が付与されることになる。⁶

(8) Tr 解釈	actor	process	actor	process goal
Erg 解釈	medium	process	agent	process medium
a 1.	The boat	sailed.	2. Mary	sailed the boat.
b 1.	The cloth	tore.	2. The nail	tore the cloth.
c 1.	Tom's eye	closed.	2. Tom	closed his eyes.
d 1.	The rice	cooked.	2. Pat	cooked the rice.

以上の分析から導かれる点としては、(1)英語のような主語として認識される argument には、格としては自動的に nom が付与され、その際の意味解釈は常に actor のごとく捉えられたものも、実際の意味解釈上では異なる participant role が必要である。(2)主語となる語の格は常に nom として

具現されているが、これはあくまで、文法上の格であり、(7a1) の boat と (7a2) の Mary とは異なった機能をもっている。それ故、自動詞の主語と他動詞の主語には異なった participant role が必要となる。

(8a-d) の主語としての argument が inanimate であったのに対し、以下の (9a-c) に見られる自動詞の主語としての argument は animate なるものである。しかし、ここでの主語は、animate なものにも関わらず、それ自体の動作の行動に対しては影響力をもつことができないと思われる。したがって、これらも actor とはいいがたいので agent とすべきなのであろう。

- (9) a. John died last year.
 b. Mary yawns in her class.
 c. The boys voice has broken.

ここでの論点は、従来同じ主語という概念で捉えられてきた argument が自動詞と他動詞においては意味的解釈が異なってくるという点である。Halliday はこの違いについて「actor の影響が及ぼす射程の有無」をそのパラメーターとしたが、今一つ「actor 自身の行動に対するコントロールに対する有無」もそのパラメーターとする必要があるように思われる。そこで、意味的解釈も重要な観点ではあるが、本論での ASP System を用いれば、X項はS、Y項はA、Z項はPとそれぞれに異なった表示を与えることが可能となり、結果として、英語の主語にはS、Aという2つの表示を付与することが可能となる。したがって、この ASP system の利点は従来の自／他動詞に具現する主語の区別を機能面からも行うことが可能であるという点である。

以上 Halliday にしたがって、英語における自動詞の主語は常に他動詞の主語と同じ意味解釈が成されないという考えをみてきたが、ここで transitive と intransitive という概念について、ASP System の観点からまとめておきたい。

(10) transitive

2つの participant を必要とし、その内の一つは動作の行為をコントロールする controller として認識され、したがって、主語であり、機能としては A function として認識されるもので、これらは human や animated being によりコントロールされている。他の participant は controller として認識されず、したがって目的語であり、これは P function をもつ。

intransitive

1つの participant しか必要とせず、jump, run, speak のような動作の行為の controller であり、その意味では transitive の A function をもつ主語であるが、一方、die, yawn break というような動作の行動に対して、no-controller であるような場合もあり、この意味では transitive の P function に類似している。したがって、これの持つ機能は S function として区別されるべきである。

さらに、transitive を特徴づけている構成素として、Hooper & Thompson は、以下の点をあげている。⁷

- (11) a. number of participants (two or more vs. one)
 b. kinesis (action vs. non-action)
 c. volitionality (volitional vs. non-volitional)
 d. affectedness (totally offered object vs. unaffected object)
 e. individually (individual obj vs. non-individual obj)

これらの中で、(11b-e) は決して文法的なパラメーターではなく、意味的なパラメータであるといえ、言語における argument への格付与は意味的な解釈によって成されるものであるという考えが反映されたものと捉えることができる。では、格の付与が意味的、あるいは語用論的観点から付与される言語があるのだろうか。次節では、そのような言語が存在するならば、どのように格付与がなされるのかという点に焦点をあわせて見ていくことにする。

は *experiencer* なのかというパラメーターによるが、これは *patient* が *affected patient* か *experienced patient* かの違いによるものと言われる。Kannada の動詞は *transitive / intransitive* による分類よりも *action / non-action* (動作／非動作) あるいは *volitional / non-volitional* (意志／無意志) による分類が適切であるといわれるが、以下の例に見られるように、この観点からの影響が格付与に現れている。¹¹

- (14) a. *avannu nadugida*
 he-nom trembled (volitional) ‘He trembled.’
 b. *avanige nadugitu*
 him-dat trembled (non-volitional) ‘He trembled.’

(14a) の *avannu* (*he-nom*) は「(病気などにより) 自分の意志で震えている」ので *nom* が用いられているが、(14b) では「(他からの影響を受けて) 自分の意志ではなく震えている」、即ち、ライオンか怪物によって震えさせられているわけで、したがって、*experiencer* ということになり、格付与は *dat* となる。動詞も *nadugida* から *nadugitu* に変化しており、格は *nom* から *dat* に変化しているものの、(14a, b) の *avannu*, *avanige* は共に主語であることに留意すべきである。

次の (15a-d) は話し手が内容にコントロールを及ぼしているか否かによって、格付与が変化する例である。¹²

- (15) a. *avanu manege ho:da*
 he-nom house-dat went
 (*nom=control*)
 b. *nanage avanu manege ho:ga be:ku*
 me-dat he-nom house-dat go-pur want
 (*dat=non-control*) (*purposeive*)
 c. *na:nu avanige manege ho:galu he:lida*
 I-nom him-dat house-dat go-pur told
 (*actually be spoken to by the actor, dat=experiencer*)

- d. na:nu avanannu manege ho:galu he:lida
 I-nom him-acc house-dat go-pur told
 (might or might not be spoken to by the actor, acc=undergoer)

(15a)は「彼は家に帰った」で、当然 *avanu* には control があるので、nom が付与される。(15b)は *avanu* が nom を付与されているが、これは *avanu manege ho:ga* という埋め込み文の主語である。主文の主語は *nanage* であり、動詞は *be:ku* である。ここでの解釈は、「私は(彼が家に行って)欲しい」というものだが、埋め込み文の動詞 *ho:ga* が purposive (意志形)を用いていることから、家に行く意志があるのは埋め込み文中の「彼」であり、主文の「私」ではない。「私」は単にそうして欲しいだけなのである。したがって、*nanage* は主文の主語であるにも関わらず、ここでは dat が付与されることになる。しかし、(13c, d)に見るように、主文の主語「私」にコントロール作用がでてくると、*na:nu* という nom が用いられ、埋め込み文中の「彼」は (15c, d) ではそれぞれ *avanige* (him-dat), *avanannu* (him-acc) という異なった格が付与されることになる。dat と acc の違いは、(15c)では「私」が「彼」に実際直接に「告げた」のに対し、(15d)では「私」は「彼」に言ったのは間接的であったかも知れないというのである。このような語用論的解釈から、(15c)の *avanige* が experiencer であり、dat が付与されるのに対し、(15d)の *avanannu* は undergoer で acc が付与されたのである。

以上、Kannada を例にとって、格付与は文法的な関係のみが決定するものではないという事例を見てきたが、今一つ Manipuri の例を見てみる。¹⁸

- (16) a. ma noṅṅə cotli
 he rain-nom wetted 'He got wet in the rain.'
 b. ma kensərnə sɪ
 he cancer-nom died 'He died of cancer.'

(16a, b)は主語はともに *ma* (he) であるが、(15a)は「彼が雨に濡れ

た」のは「雨が降った」からであり、(16b)の「彼が癌で死んだ」のは「癌が彼を侵した」からという、極めて意味的な解釈から、(16a, b)では「雨」と「癌」に、*noŋnə*, *kensərnə* という nom が用いられている。これは(14b)(15b)に見たように、*ma* (he) が主文の主語であっても nom が付与されない例である。また、以下の(17a)からは *manə* (he-nom), *sinjəŋnə* (axenom), また(17b)からは *manə* (he-nom), *bəsənə* (bus-nom) のように、nom は単文中に決して1つではなく、2つ具現することもあるという言語現象が窺える。¹⁴

- (17) a. *manə sinjəŋnə udu tuhəlləm̄mi*
 he-nom axe-nom tree-that fall-caused
 ‘He felled that tree with an axe.’
 b. *manə bəjardəgi bəsənə laki*
 he-nom market-from bus-nom came
 ‘He came from the market by bus.’

さらに、(18)からは(18a)の *tombəbunə* (Tomba-acc-nom), (19b) *tombədənə* (Tomba-loc-nom) に見られるように、ひとつの argument に2つの格付与が成されることが分かる。¹⁵

- (18) a. *tombəbu khwaynə pam̄mi*
 Tomba-acc all-nom like
 ‘Everyone likes Tomba.’
 b. *tombəbunə khwaynə pam̄mi*
 Tomba-acc-nom all-nom like
 ‘Everyone likes only Tomba.’
- (19) a. *manə tombədə sel pi*
 he-nom Tomba-loc money gave
 ‘He gave money to Tomba.’
 b. *manə tombədənə sel pi*
 he-nom Tomba-loc-nom money gave

'He gave money to Tomba only.'

以上のような格付与に関する例は、Kannada や Manipuri に限ったものではなく、日本語にも類似の例を見ることができる。¹⁶

- (20) a. 私は 太郎 に *を 挨拶する。(dative=experiencer)
 b. 私は 太郎 に *を 忠告する。
- (21) a. 私は 花子 を *に 呼ぶ。(accusative=undergoer)
 b. 私は 花子 を *に 愛す。

(20a, b) では、太郎は私の動作（動詞）により影響される対象となり、このような場合、通常は相手に直接的な関係が生じる。すなわち、挨拶や忠告は相手の前ですべきであって、間接的にはできない。したがって、(20a, b) の太郎は experiencer となり、「を」格ではなく、「に」格をとることを義務づけられる。しかしながら、(21a) では、花子は「呼ばれたから」といって、私の面前に在る必要はなく、(21b) での花子は「愛される」ことに直接的な関係はない。言い換えれば、私は花子を愛していても、花子は私を愛しているか否かは判断できないのである。この意味では (21b) の花子は単に goal であって、undergoer である。したがって、「を」格は取るが、「に」格はとることができないのである。

次に、動詞の違いにより「に」、「を」を選択し、意味の違いが生じる例を見てみよう。

- (22) a. 犬は 太郎 に *を 咬みついた。
 b. 野党は 与党 に *を かみついた。
- (23) a. 犬は 太郎 を *に 咬んだ。
 b. *野党は 与党 を *に かんた。

(22a) の「かみつく」という動詞の対象となる participant は experiencer であり、「かむ」という動詞の対象となる participant は undergoer とみる

ことができ、この違いは、意志をもって「かみつく」のか、或いは単に「咬む」のかの違いとみることができる。これは上でみた volition / non-volition の違いに相当するもので、(22b) のように比喩的に用いられる「かみつく」という複合動詞にも volition が含まれるが、その意味合いのない (23b) が存在しないのは、volition のない (23b) のような表現の必要性がなく、それ故に、存在しないのであろう。以上の点から、日本語にも目的語としての patient には undergoer と experiencer という2つの格付与が成されていること。さらに actor と動詞の相互作用による volition / non-volition, の違いにより、「に」格と「を」格の相違があることが分かった。

最後に actor のコントロール作用という点に関し、埋め込み文内の participant に対する日本語の格付与について見ておきたい。

- | | | | | | |
|----|----|----|-----|---------|------------------------|
| 24 | a. | 私は | 彼に | 会いたい。 | I want to see him. |
| | | | *彼が | | *he |
| | b. | 私は | 彼に | 会って欲しい。 | I want him to meet. |
| | | | 彼が | | *he |
| | | | *彼を | | |
| | c. | 私は | 彼に | 見て欲しい。 | I want him to look at. |
| | | | 彼が | | *he |
| | | | 彼を | | |

英語では埋め込み文の主語は主文の目的語に上昇される object raising という文法的な規則により、これは常に object case をもって具現される。しかし、日本語では (24a) のようにコントロールをもつ participant が単文の主語でない限り、(24b, c) に見られるように、「が」、「に」、「を」格が具現する。これらは、それぞれの participant におけるコントロール作用という観点からみれば、それぞれの格付与にも的確な説明を与えることができる。例えば、(24b) で埋め込み文「彼」に「が」格が付与されるのは、「会う意志をコントロール」しているのは「彼」であることになる。また、(24b) で

「に」格が許容されるのに対し、「を」格が許容されないのは、「会う」という動詞には patient としての「彼」は必ず actor の面前にいなけなければならない、したがって、experiencer としての直接影響をうける participant としての「彼」は許容されるが、単に goal としての undergoer は許容されないという理由からであろう。それに反し、(24c)の「見る」という動詞には patient としての「彼」は actor の面前にいてもよく (experiencer=「に」), いなくてもよい (undergoer=「を」), また「誰か第三者が(この場合 actor である「私」の意志はない), 彼を見て」もよいので、これは両方とも許容される。「が」格の付与については(24b)と同じ理由による。以上のように、英語が埋め込み文の主語は必ず objective case で具現するのに対し、日本語では、様々な格が具現することに留意すべきである。

5. 終 論

本論では言語における格の付与は何によるのかという点を英語, Dyirbal, Kannada, Manipuri, 日本語という言語を比較することによって論じた。言語の格は、その機能から Accusative system と Ergative system の二つに分類されるが、これは動詞の Intransitive / Transitive という2つの分類に対し、主語に具現する格が異なるという結果から得られた分析で、本論では ASP system として、それがもつ機能を形式的な分析として論じた。その結果、文法的に規定される主語、目的語という概念に対しても、常に主格、目的格(対格、与格)という格が対応しているのではないということが理解できた。

主語、あるいは格の分析は形式的な枠組みによる中であって、Halliday の Ergative な解釈による英語の分析は、意味的解釈を取り入れた興味深い分析といえよう。格付与が、一方を形式的(文法的)解釈とし、他方を意味的解釈から成されるとすれば、この Halliday のアプローチは、英語という多分に文法的な言語を用いて、彼方に存在する意味的解釈を必要とする言語

への橋渡しの役割をもった分析法といえるものである。その結果、英語の主語も文法的には nom という格表示がなされるが、その意味解釈、及び、機能は異なったものであるということが分かった。

次に、インドで話されている Kannada や Manipuri について Bhat の分析を紹介しながらこれらの言語の格付与について見たが、これはこれらの言語が、意味、語用論的解釈によって、格付与が成される言語であるという理由からである。Bhat の分析を見ると、動詞も決して、tr / int に分類されるのが絶対的であるというのではなく、動詞の性質から、action / non-action という分類も可能であり、さらに、actor の意志の有無により、volition / non-volition という分類も必要であることが分かった。さらに日本語における格表示に、これらのパラメーターを応用して分類すると、日本語における「に」格と「を」格の具現の分布、また埋め込み文における種々の格表示が具現する言語現象について、的確な分析が可能であるように思えた。これらの点から、格表示に関して、言語は文法的、形式的なものと、意味的、語用論的なものの2つに分類する必要性があり、その中であって、日本語などは、基底には文法的要素をもちながらも、その格付与の決定に際しては、多分に意味的、語用論的解釈を含むものであるといえよう。

本論で扱った言語はその数も少なく、日本語に関しても決して分析例は多くない。したがって、言語がもつ格表示という大きな問題を扱うにはさらにデータを集めて分析する必要があるのは言うまでもない。しかしながら、序論で見たように、英語を始めとする印欧語の多くの格表示が文法的関係において、主語 = nom, 行為者 = actor という関係が成り立つ中で、Kannada や Manipuri のように意味論的、語用論観点からの格の付与が成される言語があるという点や、日本語にそれらと類似した現象をもっているという点を基に、本論が格表示についてのさらなる研究、分析が行われることへの何らかの一助になれば、ここでの目的は達せられたと言えよう。

注

- 1 ここでの主語、行為者、主格というカテゴリーはそれぞれ、文法、意味、格表示を表す。
- 2 例えば、Comrie, B (1990) *Language Universals and Linguistic Typology*, 2nd ed. (Oxford: Basil, Blackwell) 及び、Dixon (1979) 'Ergativity' *Language* 55, pp. 59-139, 等を参照のこと。
- 3 Comrie (1990) p. 112.
- 4 Halliday, M. A. K, (1975) *An Introduction to Functional Grammar* (London: Edward Arnold)
- 5 Halliday は上掲書 pp. 144-146 において、ergative pattern については transitivity と voice という観点にたつて、特別な解釈のもとで論じている。
- 6 詳しくは Halliday (1975) p. 146 を参照のこと。
- 7 Hooper & Thompson (1980) 'Transitivity in grammar and discourse', *Language* 56 pp. 251-70.
- 8 Kannada (カンナダ語)は Dravidian に属す言語で、現在、インドの南部 Karnataka 州で2700万人の話者によって話されている。また、Manipuri (マニプリ語)は [Tibeto-Burman, Kuki-Chin Sub-group に属す言語で、インド Manipuri 州で約100万の話者人口をもち、Meitei とも呼ばれる言語である。特に Kannada については Sridhar, S. N. (1990) *Kannada* (London: Routledge) が詳しいが、日本語と同じ SOV 構造をもち、その他の言語構造にも日本語と類似点が多く、語用論的観点からの格付与に関しては今後の研究に待たねばならぬが、極めて興味が多い言語である。
- 9 Bhat, D. N. S. (1991) *Grammatical Relations: The evidence against their necessity and universality* (London: Routledge) Kannada と Manipuri の言語データに関しては全て本書に負っている。
- 10 Bhat p. 40.
- 11 Bhat p. 41.
- 12 Bhat p. 46.
- 13 Bhat p. 120.
- 14 Bhat p. 120.
- 15 Bhat p. 129.
- 16 ここでの論考は Bhat の Kannada, Manipuri の格付与に関する言語データを基礎にした、日本語の格付与に関する語用論的観点からの試論というべきものだが、今後もドラヴィダ語族に属する上述の言語との比較をしながら、さらに発展させたいと願っている。

Synopsis**Case Representation and Language Universals**

—On the Grammatical and Semantic Relationship of Case—

Masaaki Tatsuki

In English, actor and nominative case tend to coincide with subject, which results in the subject being represented by the nominative case in most instances. Recent studies, however, reveal that subject is not always represented by the nominal case but by the ergative case in certain languages. Accordingly, it follows that a case assignment is not a language universal, but a language-specific fact.

Here two questions are raised. Is case always assigned by grammatical factors; i, e., does subject always appear in the nominative or the ergative case? Secondly, what causes case assignment? This paper first surveys the recent treatment of the accusative and ergative systems (ASP system) in languages, and then introduces Halliday's 'ergative' treatment of English. Halliday claims that the verb does not need to be categorized into intransitive / transitive, but into ergative / non-ergative. Consider the following examples:

- | | |
|----------------------|-----------------------------|
| 1a. The boat sailed. | b. Mary sailed the boat |
| 2a. The cloth tore. | b. The nail tore the cloth. |

Traditionally, the verbs in Clauses (1a, 2a) and (1b, 2b) are considered to be intransitive and transitive, respectively. Even the verbs are classified differently, subjects of these verbs are considered to carry the same participant role of 'Actor'. However, 'the boat' in (1a) and 'the cloth' in (2a) cannot act by themselves, since these are inanimate things. Accordingly, it is natural to say that 'The boat sailed because Mary sailed it.' and 'The cloth tore because the nail tore it.' This being so,

'the boat' in (1a) and 'the cloth' in (2a) should not be assigned the same participant role of 'Actor', as in 'Mary' in (1b) and 'the nail' in (2b). For this reason, Halliday advocates a new participant role of 'Medium' for 'the boat' in (1a) and 'the cloth' in (2a). Along with this semantic interpretation, Halliday maintains that the above difference between (1a, 2a) and (1b, 2b) leads to a new verb classification, which he proposes as 'non-ergative' (1a, 2a) and 'ergative' (1b, 2b). In this way, even the English 'subject', which always seems to have 'actor', may carry the different participant role 'Medium' depending upon the clauses. Thus the case of subject may also be assigned as 'non-ergative' for intransitive verb (1a, 2a), or as 'ergative' for transitive verb (2a, 2b), instead of the permanent 'nominative case'.

The paper next considers data taken from Kannada and Manipuri, both spoken in India. According to Bhat, the case assignment of these languages is done through speaker's intention. Consider the following Kannada examples:

- 3a. avannu nadugida
 he-nom trembled (volitional) 'He trembled.'
 b. avanige nadugitu.
 he-dat trembled (non-volitional) 'He trembled.'

The pronoun 'avannu' in (3a) is in the nominative case; the actor trembles by his own will, because of his sickness or fever, and the activity is thus volitional. On the other hand, 'avanige' in (3b), is in the dative case; the actor trembles because of an external source, such as a lion or a monster, and the activity is thus non-volitional. Similar data can also be found in Manipuri. Interestingly enough, Japanese also behaves in the same fashion. Consider the following examples taken from Japanese.

- 4a. Inu wa Taroo ni kamitsuita.
 dog nom Taroo dat bit 'The dog bit Taroo' (volitional)
 b. Inu wa Taroo o kanda.
 dog nom Taroo acc bit 'The dog bit Taroo.' (non-volitional)

The above Japanese examples show a difference between 'ni(dat)' and 'o(acc)' in which the former designates 'volition', while the latter designates 'non-volition'. Although the verbs in the two clauses are different, case assignment depends upon the speaker's intention. It is this factor which leads to the semantic or pragmatic interpretation of case assignment.

Consequently, it appears that case assignment in language cannot be described merely by grammatical factors, but by semantic or pragmatic factors as well. Verb classification might be reconsidered as divided into action/non-action, or volition/non-volition, in contrast to the traditional transitive/intransitive distinction. This distinction applies to languages such as Kannada, Manipuri, and Japanese. This paper helps to show how a pragmatically-based classification will provide a more adequate characterization of case assignment.